



Title	大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狹衣物語』巻四・翻刻と解題（下）
Author(s)	小林, 理正
Citation	詞林. 2020, 67, p. 1-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75582
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』卷四・翻刻と解題（下）

小林 理正

はじめに

本稿は、前稿「大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』卷四・翻刻と解題（上）」（「詞林」第六五号、平成三一年四月）に続き、大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆『狭衣物語』（以下、元斎本）の卷四後半の翻刻を行うものである。これにより元斎本卷四の本文全体が確認できるようになつたことになる。

一、元斎本と流布本の差異

元斎本卷四の本文を流布本である元和九年本や承応版本の本文と比較すると、異同が認められる。このことは前稿でも指摘したとおりである。たとえば、本稿における範囲においても、元斎本に

あそひ給に^{ても}又まことしきことふえ文のかたに
つけても花四葉山のおもしろき春夏秋冬につけてもをの
つかさくらゐをのそむ事もこなたに申は何事もこよ

なう身のうれへを思ひをかなへ給かたさまもあけくれ
むかひ見たてまつらまほしき物におもはれ給て（七八丁
裏）七九丁表^①

とあるところ、元和九年本には

○ 元和九年本・卷四之上・六九丁裏、七〇丁表^②

あそひ給ふに^{つけても}又まことしきかた物をならひを
の（身のうれへ思ひをかなへ給ふかたさまもあけく
れむかひ見奉らまほしき物に思はれ給ひて

とある。元斎本と元和九年本で囲み表示部が共通している点を踏まえると、二つの囲み表示部の間にある斜体の本文が対応関係にあるとわかる。では、この元斎本の斜体本文は如何なる性格のものなのであろう。挙例部は三谷榮一が卷四本文の検討において取りあげたことのある箇所でもある。三谷論稿を確認すると、当該本文は第二系統本文（異本系本文）と認定されている。三谷により「第二系統」伝本とされた為秀本當該部の本文を掲げることで、元斎本本文との差異を確認

しておく。

○ 為秀本・九三丁裏～九四丁表

いますこしこの御かたをは心ようひしてことふえふみの
かたのかたにつけても花もみち山のおもしろさ春夏秋冬
につけても又をのつからつかさくらゐのなることもこな
たに申はなることよなう又ざらに身のうれへもみた

てまつるにいのちのひゆく御ありさまなれば
いくつか異同が認められるが、為秀本と元斎本の斜体本文
が同根のものであることは明らかであろう。したがつて、元
斎本の挙例部本文は流布本系本文の中に異本系本文を混態し
たものであるとわかる。「紹巴」予本が流布本の原型^{〔5〕}との見
解を提示した先行論にしたがえば、元和九年本は紹巴本の一
本・元斎本から異本系本文の箇所のみを取り除き、本文を整
えたことになる。しかし、如上の想定が成り立つならば、し
いて紹巴本に「流布本」の原型を見ずとも元和九年本の本文
は発生しうることになる。元斎本の有り様を踏まえるかぎり、
「流布本の原型」に紹巴本を見る必要はないのではないか^{〔6〕}。

ところで、かつて鈴木一雄は「古活字本（元和九年本・稿
者注）の底本として紹巴本、京大久田本、藤浪本などが考え
られている」と指摘していた。挙例部を京大久田本・藤浪本
を含めて確認すると、京大久田本は本行本文が元和九年本と
同様だが、「をの／＼身の」にミセケチ点を施したうえで、「物
をならひ」と「をの／＼身の」の直後に補入記号を付し、元

斎本・為秀本の斜体本文を記している。藤浪本は元斎本と同様である。鈴木の挙げた伝本群から流布本狹衣物語の本文をみつめると、元和九年本の本文は京大久田本からのみ生じることになる。京大久田本が紹巴本と接触したか否は未詳だが、これまで充分に検討されてこなかつた京大久田本とのみ流布本の本文が一致する実情は看過してよいものではあるまい。

なお、このほかにも紹巴本、京大久田本、藤浪本の三本の中で京大久田本が流布本と重なる事例を確認している。これまで鈴木の言及は顧みられることがなかつたが、京大久田本・藤浪本を加えたうえで、流布本狹衣物語の本文を読み解いていく視座が必要であるといわねばなるまい。この点については別稿を期したい。

前稿の翻刻に稿者の目移りによる脱文や字形類似に因る翻刻ミス、ならびに助辞の見落としなどの誤りが多数確認された。この場を借りてお詫び申しあげる。正誤表は【表二】として後掲した。ご確認いただいたうえ、前稿本文の修正をお願いしたい。

【注】

（1）元斎本の本文は原本の撮影写真に拠る。

（2）元和九年古活字本の本文は三谷榮一『古典資料類従7
九年心也開板古活字本』（勉誠出版）に拠る。

（3）三谷榮一『狹衣物語の研究「伝本系統論編」』（笠間書院、平

成二二年）。初出は昭和三七年。

（4）為秀本の本文は『静嘉堂文庫所蔵物語文書集成第一編 古物語』（雄松堂フィルム出版、昭和五六年）に拠る。

（5）川崎佐知子「紹巴所用『狹衣物語』とその意義」（『『狹衣物語』享受史論究』思文閣出版、平成二三年。初出は平成一三年五月）。

（6）たとえば中田剛直は「『狹衣物語卷一伝本考』（『国語と国文学』第三五卷五号、昭和三三年五月）において、「紹巴所持本を写した天満宮本若くは毛利元康本そのものに拠れるかは別」としながらも流布本の原型を「連歌師間に所伝せし一本に拠れる事は間違ひないであらう」と述べている。

（7）『新潮日本古典文学集成 狹衣物語上』（新潮社、昭和六〇年）。

【附記】

貴重書の閲覧、ならびに翻刻掲載許可のご高配を賜りました大阪天満宮御文庫、ならびに関係各位に衷心より御礼申しあげます。

（こばやし・ただまさ 本学博士後期課程）

〔表一〕前稿正誤表

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
むかしより聞、そめて	ありつる返りこと	まいり給へければ	御いかほとに	中将ほのみですかせ給にこそ待けれ	すくれたりける	あらすなしたるに	たゝ独かしつき	みゝととめ給へる	そと、はせ給へは	山かへるとや	こそそのなかにも	三千大世界	このかはら色はめつらしく	誤
むかしよりき、そめて	ありつるかへりこと	まいり給へれば	御いかほとに	そおほされける中将ほのみですかせ給にこそ待けれ	すくれたりけるふるめきにけるそいとくちお しう	あらすしなしたるに	たゝひとりかしつき	みゝと、め給へる	そととはせ給へは	山かへるとかや	こそそのなかにも	三千大千世界	このかはらぬ色はめつらしく	正
四〇丁才・一行目	三八丁才・五行目	三六丁才・一行目	三三丁ウ・三行目	三三二丁ウ・八行目									一五丁ウ・三行目	所在
四〇丁才・一行目	三八丁才・五行目	三六丁才・一行目	三三丁ウ・三行目	三三二丁ウ・八行目	当該本文が第九行トナル								一七丁オ・九行目	その他

16	さかり御身やつし	さかりの御身やつし	四二丁ウ・三行目
17	人こそ見えね秋の	人こそ見えねあきの	四六丁ウ・四行目
18	さらんとくちおし	つらんとくちおし	四七丁オ・二行目
19	いとゝのおりゆかしう	いとゝのこりゆかしう	五三丁オ・二行目
20	見くるさをそ	見くるしさをそ	五五丁ウ・三行目
21	かゝ御せうそこ	かゝる御せうそこ	五六丁ウ・五行目
22	えかよひはや	えかよはずや	五八丁ウ・九行目
23	まゝにありあけの	まゝにはありあけの	六〇丁オ・六行目
24	ありぬやう見ない給て	ありぬへう見ない給て	六一丁ウ・九行目
25	まつりてううちゑみ	まつりてうちゑみ	七三丁オ・八行目
26	またたゝしのひやかに	またはたゝしのひやかに	七三丁ウ・一〇行目
27	思ふなりおひ人ひ	思ふなりおりい人ひ	七三丁ウ・一〇行目

【翻刻】

【凡例】

一、底本は大阪天満宮御文庫蔵木戸元斎筆本『狹衣物語』（請求記号・三〇一）卷四の写真版を用いる。

一、本文は原本の体裁を可能な限り尊重するものとする。丁移りを「」で示し、丁数と表裏を「」（〇丁才（ウ））と記す。なお丁数は墨付き丁数である。

一、変体仮名はすべて現行の平仮名に改める。また「ハ／ニ／ミ」は「は／ニ／ミ」とし、旧字体、異体字は通行する字体に改める。

一、ミセケチはすべて「取り消し線」で示す。

一、削訂の場合「X（Y）」と表し、削られた文字を丸括弧内にいれて示す。

一、傍記は、該当本文横に記す。なお、補入記号は「〇」で示す。

一、損傷本文と思しい表現も原本にはあるが、すべてそのまま翻字する。

一、今回は前稿の続き、七四丁才より以降を翻刻する。

とりそくしたるをありつくへきやうに物せよとの給を聞ほとはたゞうちゑみて殿うへもなにしにかきこえさせ給はむいかにも／＼御心とめさせ給はん人をはいかてとこそそのたまはすれまいてあなかたしけなやいかにおほしめしよろこはせ給はんものをあなうれしやおもふことこそなくなり侍ぬれと聞ゆれば心とまりなとたちまちにさたむへきならねと心ほそけなめる人なれはなにかは心やすからず物むつかしき世中のなくさめにもとおもふなりとかたらひをきてわたり給ぬるまにそ大貳ちかくまいりよりて御木帳のかたひらひきあけて見れば御ふす

」（七四丁才）

まのしたにうつもれて人おはすとも見えぬに御くしはかりこちたけにたゞなはりみていと所せけなるいてよもなに事もなのめにおはせん人をかくまてもなし給はしとはおもひつれとうちみるはなをおとろかるはよりてひきのへてすそうちやりたるにまことにをくれたるすちなしとはこれをいふにやと見えてとかくもすへるつやすちのうつくしさなどのさい院の御くしにいとよくに給へりなかさそすこしおとりてやと見ゆるは御としの程にしたかひ給へるにやとみるにかうおとろききこゆるけはひをきて弁のめのともよりたれはとの御けしき

また見奉りしらぬさまに見えさせ給へるかめつらしさに
」（七四丁ウ）

おとろかれ侍てちかうまいり侍にことはりにこそとこの御くしはかりにまつ思ひ給へなりぬよと、もに世中をた、よはせ給てあけれとのうへの御まへよりはしめまいらせわたくしの心きもをまとはし侍りてた、すこしのほたしにおほしとまりぬへからん人を見き、いてはやとからくにまでもたつねまほしけにおほしさはくめる御いのりのしるしにやとかへす／＼むねやすまる心ちし侍てなむまいてうへの御まへなどきかせ給は、いかはかりおほしよろこはせ給はん物を一品宮わたりに

」（七五丁オ）

きかせ給はんにこのころはおりさへいとおしうなとこそその給はせつれなど君の御心のうかれまとひて露はかり心と、め給人もなくてさはかれ給へる年ころの御物かたりこまやかにかたりいて、よろこふにけにかはかりまでおほしと、むる事なかりつらんにあすのふちせはしらすけふはかりにてもいかなる御すくせにてかは人もかう見しり給はかりの御けしきにもとうれしさもをろかならねといとさはかりならん御心のうちなきやうはありかたくこそ侍へかなれとしこもかやうなる御けしきとはうけたまはりなからき、しま、たつねとるらんあまたの

」（七五丁ウ）

つらにてはほいなしやとのみおほしつ、むめりしほとにあさましう打すてきこえさせ給てしのちいくらはかり

のほとをたにもへすあくかれいてさせ給ひぬるいかなることいかとほれ／＼しき心ちし侍てなむ皇后宮よりもきこえ給やうも侍しをかうわかぬ御ことにしも物せさせ給てつるにいかなる事侍て身つからの浅ましうもてなしきこえたるにかなり侍らんとやすきそか侍らぬにいと、御物がたりともにしたくつれたる心ちし侍れといふさまもいとめやすき人さまなりあなまか／＼しやおほろけにおほしさためたる御心には

」（七六丁オ）

侍らしよし見奉り給へ春宮にまいらせ給へらんにおとりたる御ありさまによももてない奉り給はしなど心をやりていひちらしつ、御くしをうちもをかすめてゐたりまことにさい相はきのふはわたり給はすなりにしにおほつかなさにふみたてまつれ給ほとに大将殿より御文あるをまつ見給へにはかかるやうにもおもひ給へしかととみには日つるてもよろしからず侍しかはよへなむこの侍ところにわたしきこえさせてし弁なとはさはかれきこえなむとていみしうおち侍しかとやすくふみわけ給へるあと、もみえ侍ら

」（七六丁ウ）

さりし庭のけしきも見をきかたくおもふたまへられしかはなむかんたう侍ましうはゆふつかたたちより給へ身つからきこえんなどやうにその給けるさこそ

はとおもひつることなれといとにはかにかる／＼しき
さまにてわたり給にければくちおしうおほゆれといて
さはれ中／＼まかせたてまつりてんかしうちなとにき
かせ給はむこともひんなかるへければことさらにしのひ
たるさまにもてなさむとし給ならむとおほせは
御返事にも月ころわづらふこと侍つる人のこの五六日は
いたうくるしかり侍れは見たまへあつかひてふる郷も

」（七七丁オ）

いと、あらし侍りつるにたちよらせ給けるをなむおとろ
き給ふるさてもなとか御前にはめすましきなと聞え
給へり弁のめのともとにもにはかにわたり給にける
あさましくなどの給はせてふち衣なれとなへて
ならすきよらなるともたてまつれ給へりひめ君にも
かうなむふ見侍るときこえさせていみしうなき
しほみ給へるきかへさせたてまつりなとす家は

けさよりつくろひたりつれとみつはよつはにか、
やくやうなる殿つくりのしつらひありさまよりはしめ
さふらふ人／＼のなりかたちなどのおほろけの人さし

」（七七丁ウ）

いつへくもあらすめてたけなれは水鳥のみきはにたち
いてたる心ちしていとわりなしおほいとの、おはします
かたよりはへちに五けん四めむなるしん殿たいらうわた
殿などみなこの御かたの女房のさうしさふらひくら人所

などにせさせ給へるなるへし庭のまさこのしろかね
かと見えたるに木草のたゞまひまでもはねてならす
みゆる枝さしに吹よる風のとなひもおもしろくいみしう
てこの世とはおほえぬ松の木たちありさまをみかとの
ほかより見いれてもこのうちにあけくれさふらふ人の
なに事をおもふらんいかなるさまなる人か、るありさま

」（七八丁オ）

すらんなどおもひやられしを身のうへになりて見いたしたるは
身をかへたる心ちのみそするたかきもくたれるも天下にす
こし人なみ／＼にかすへしらる、きはのほうしそくは明くれ
たちかひつ、いかなるわさをしていさゝかも御覽し入られん
と心をつくしてあしたゆふへのいとなみにまいりつかふ
まつりてもなにはかりのめてたきことなくた、一こと葉も
物なといひふれ給をかしこくうれしきことにてやむこと
なきかむたちめなともうちわたりの宮つかへよりも
まつ／＼とまいり給つゝ日をくらし夜をあかし給につけ
ては又いますこしこの御かたにまいりようし給そことはり

」（七八丁ウ）

なるやあそひ給につけても又まことしきことふえ文の
かたにつけても花四葉山のおもしろき春夏秋冬に
つけてもをの／＼つかざくらゐをのそむ事もこなたに
申は何事もこよなう身のうれへを思ひをかなへ給かた
さまもあけくれむかひ見たてまつらまほしき物におも

はれ給てもてかしつかれ給へるありさまのうつくしう
めてたきをはさる物にてこゝら見る人のなかにもこの
御かほかたちけはひありさまにた、夢はかりにても打
なすらふへきかこの世になかりけるよとあけくれすべ
日数にそへつ、見奉るたひとには若君のすくせは

」（七九丁オ）

人にはまさり給へりけりとのみ思ひしらるゝにみ奉りて
のちはよひのほとなとたにたちかくれ給おりもなく
まれゝも一品宮はかりにうちかよひまいり給もあかしも
はてすひるまのほともくらしかたけなる御けしきを
見るにつき草に聞たてまつりし御心のうしろめ
たきなれと思ひしよりもすきたる心ちのみするに人々
のすきにしかたの物かたりなとをきくにそなをいと
あやうくも又たのもしくもありける殿うへは御けしき
のすこしよのつねなるをた、御いのりとものかなふなめり
とうれしうのみおほざるれは宮によるむけにとまり

」（七九丁ウ）

給はぬこともうちくにはなけき給つ、え申給はぬに
わか宮大将の御かたには斎院ににたてまつりたる人そある

みやのひめ君にやあらんされはまろをはふところ
にもよるはねさせすとうらめしけにおほしての給
をあやしき、給て大貳のまいりたるにうへま
まことかさることやととひ給へるははしめよりの

こと、もをきこえさせてとはせ給はさらんかきりは
なにか申すよからぬこと、こそさいなみ給はめと
の給はすればきこえさせてなむ宮にはいと、物
うけにおほしめしてよしなきありきなどもいまはせ

」（八〇丁オ）

させ給はすこよなうかつきたる御けしきに見えさせ
給へはうれしく見奉り侍なり御かたちなどこそ
よき御あはひにみえさせ給へさい院にそあやしき
にたてまつらせ給へるなどかたりていとめてたしと
思ひきこえたるをき、給御けしきもけにいとうれ
しけなりなとさの給ともみつからひとりにはいま、て
の給はさりけるかすならさらん人のきはにてたにす
こしも哀とおほしたらむはをろかにもえ思ふましきを
まいていと心くるしき御ことにこそあなれにはかに
わたり給ていかにつ、ましくのみおほざるらんときこえ

」（八〇丁ウ）

あつかひ給ほとに殿わたり給てなにことそとの給へは
しかくのことありけるをいままでしらさりけるか
あやしさかの御心ひとつに思ひあつかひ給ふらんもほい
なきことなりやとの給へはいみしうき、おとろき給て
すべて大貳か心なむくちおしきなりみつからこそうちに
きかせ給はんことなどによりてさもつら見給はめさり
とてもそれにしたかひてそこにさへしらすかほつくり

てあるへきかはそのともにあるらん人も宰相もいかにあやしく思ひのほなるやうに思ふらんといみしうつかり給てさるへき人／＼めしつ、御しつらひもの／＼

（八一丁オ）

しくてうとなどもひきかへあらたむへきさまにの給はせなとしておほしをきてもてかしつきこえさせ給へるさまかきりなき物におもひきこえさせ給へる斎院の

御心さしにおとり給へくもなかりけりとまりし人／＼も又さらぬも心ことなるもかすしらすまいりつとひ宰相もおもふさまにいて入見たてまつり給にこ宮おはしてかきりなき内まいりにおはしたちた、ましもえかうしもやとおもふさまにおはさるゝにもうしろめたくいみしき

うちおほしいつるはいとくちおしうおほえ給けり大殿は

」（八一丁ウ）

かくもてかしつき聞え給ても一品宮にまいり給ことのかたきはいとかたしけなくあるましきことにおはさるれはさるへきおり／＼に御けしきとり給つゝなを人めこよなかるましきさまにもてなしきこえ給へくをしへきこえ給をみつからの御心にも心にまかせてもえあるましき身そかしとみなおほすことなれとうちきくにはいてやとてもかくとも身のくるしかるへきすくせそかしとおほすに物も申給はすかしこまりてまめたち

給へるを又さそおほすらむかしと見奉り給にはなあちきなやかうまでうつゝ人にてみるへかりし人かは

」（八二丁オ）

これよりあるましき心をつかふともつゆはかり心にものしくおもはむことをいふへきならすなとおほせはた、すこし物おもひなくさめたる御けしきなるをめでたくうれしくたれもおほしてかけてたにきこえ給はさりけりされともとよりかよひまいり給し夜のかすはかくてのちとてもかはることなうもてなし給へるをた、つねのことにていまはた、あてやかにてみしらぬさまにもてなして物し給は、中／＼に心くるしうかたしきなきかたには思ひきこえさせ給へきをあさましう打ゆるう夜もなくうと／＼はつかしうつらき物のみおほして

」（八二丁ウ）

はかなきことはのいらへもまれ／＼はおもひのほかにとりなしてことすくなにいらへない給つゝはつかしけにらう／＼しけなる御ましりに心よからす見をこせ給へは月日にそへてわつらはしさのみまされはかやうのこともとやかくやとうちかたらひいひもなくさめたてまつり給へうもなけれはた、かたみにをしこめて谷のむもれ木にてそすくし給ける女宮もとしこはあさましう見まうき心とおほしなからさすかにそのこと、とりたて、なめけにみえきこゆることもなけ

れはたゝ心のくせにこそは身こそつらけれどおほし

」（八三丁オ）

しりて人のつらさはとかむましきにおほしめし
つるをいとかうまたしらすめてたき御ながらひの
ためしにいひたてらるゝかたつかたさへいてきにたれは
いとゝいふかたなうのみおほされてやかてこの御はての
ほとにあまになりてみえすなりなはやと人しれす
おほせとそれにつけても人をも身をもうらみ給て
身をすてつるためしにいま行すゑまでもいひなされん
さまの人わらはれに心うかるへきを又さりとてつわには
たえはてむありさまをかはらぬさまにて見はてんも
いますこしおこかましく我心のうちもなくさめ所なかる

」（八三丁ウ）

へしなとおほしなりてうすすみそめをはやかてたち
かふましくまうけさせ給てわたり給へるおり／＼も
すへてかくれつゝさらに見えたてまつり給はぬなり
けりすきにしかたはかやうなるよな／＼もさして心
とまるかたのなかりしかはこそ姫君ふところにふせ
たてまつり給又わかき人／＼とはかなき物かたりなど
うちしつゝまきらはしあかし給しかいまはよろつに
おほしつゝめと見まくほしさにはいさなはれ給てさのみも
えつくろひやり給はぬをいとゝあさましとのみ御心に
あまるおりは二三日などもおきあかり給はすなきし

」（八四丁オ）

つみ給へりかやうにて年もかへりぬれは大将殿の御かたは
女君の御すかたなとこそあらたまるしるしとても花やかなら
ねと殿の御かたにもとよりさふらひし人／＼はきぬの
色とも春のにしきをたちかさねたりさま／＼いはゐ

過しつるはての十五日にはわかき人／＼こゝかしこむれ
みつゝおかしけなるかゆつえひきかくしつゝかたみにうかゝ
ひまたうたれしとよういしたるゐすまひおかしう見
ゆるを大将とのは見給てまるをあつまりてうてさらは
そたれも子はまうけむまことにしるしあることなは
いたくともねんしてあらんなとの給へはみなうちわらひ

」（八四丁ウ）

たるにいとゝいまはさやうなるあふれ物いてくるし
き世にこそとうちさゝめくもありけりわか宮そちい
さきかゆつえをいとつくしき御ふところよりひきい
てゝうちたてまつり給へはうちゑみ給てあなうれしや
宮のあまりかたしけなくおほえ給にわたくしの子
まうけつへかりけりとかひ／＼しくよろこひ申給も
おかしやかて申とり給てひきかくして女君のおはする
木丁のかみよりやをらのそき給をおかしとたれも見
たてまつりつゝのひてわらへはあながま／＼とてかき
給弁のめのとはうれしきなからさすかにあやうけに

」（八五丁オ）

おほえてかほうちあかめたるそおかしかりけるあたらしき
年のいま／＼しさにやいとくろきなとはなくてあさきの
こきうすきなとめつらしきさまにあまたうちかさねて
うへにおなし色のむものおり物なとかさなりたる
もいとこは／＼しくはえなかるへきをあくまではなやかに
なよ／＼とにほひおほきなし給てならひしてそひ
ふし給へる御うしろはふきよらむ風の心もうしろ
めたう心くるしかるへうおほさるれはこのつえもさし
よせこれ見給へいまゝて子もたすとなけき給てまろか
こしうてとてわか宮のとらせ給へりければわひしう

」（八五丁ウ）

いたきめをこそ見つれまことならは御ためおそろしか
なることをむつかしきわさかなとの給へは御かほいみしう
あかくなしていと、うつふし給へるか世にしらすうつくし
けなるもなをあさましきまで思ふ人にに給へりける
かなと見給にいと、あさからす心さしもまさる物から
かはかりをなくさめにてやみねと神仏のをきて給へり
けるにこそはとかたつかたのむねはなをうちさはけは
女君のもちたまへる筆をとりて

たつねみるしの秋もまかひつゝなを神山に
身やまどひなんなど人見るへうもあらすかきけかし

給女君のまんなやかんなやさま／＼うちとけてかい給
にかきませて

」（八六丁オ）

へるすみつきもしやうなどのまことにすくれておかし
けなるをうち返／＼見給にも思ひしことのかなはぬには
あらすこのかみ山のまとひはまめやかにはあるへかりし
ことかはとおほしなす御すゝりにむめかさねのかみの
なへてならぬかさねてをしまかれたるかあるをとりみて
見給へは皇后宮の御ふみなりけり日ころは行ゑなう
おほつかなき事を思ひ侍つるに一日ちかきほとと
宰相の物せしかは心やすくなり侍れとかはそひ
柳は猶いかにそや侍りけるとて」（八六丁ウ）

おなしくはこたかき枝に木つたはてしたえの梅に

しつえはこと人のいはむやうにいとからき事もの給
はせたる物かな御返はいかゝきこえ給つるときこえ給
へとはか／＼しうもいらへ給はねはまめやかに春宮い
かにやすからすおほすらんあさましきことなりやあや
まりてもゆつりたてまつらむこそほいにて侍へけれ
庭たつみ見つけたりし日などわか物におほいたりし
物を又こよなうとりわき給へりしも人しれすべく
おしきすくせの程とはおほしるらむかしさはありとも

」（八七丁オ）

いまはなにかはさもおほすさらてもかひなからぬやうも
ありなむなとこまやかにうちかたらひきこえ給へる御
あはひみるかひありてめてたきためしにしつへき

かやうになのめならす見るかひある人をあしたゆふへに
みなつさひ給ふには過にしかたの物なけかしさもみな
わすれ給ぬへけれとわか宮のよるの御ふところあらそひ
のわかくしさをなくさめきこえ給たひとにもまつ
かきくもり物哀なる心の中は露はかりありしにかはる
ことなかりけりとさまかうさまにつけつ、あさましう
おもはする心のほとを見えたてまつりてもやみぬる

」（八七丁ウ）

かな一品にまいりそめしころほひは心のうちのこかれま
とひし程をゆめのうちにもかよふたましゐあらはをの
つからしり給ひなんとたのまれしをいとみしにもたる
とありし御てならひをいとおしくかなしかりし物からなへて
よつかぬ心のくせともおほしやすらむと思ふかたもなく
さめられしをこのころはをはすて山の月にはあらぬ
我心にもきこえやらんかたなつてひさしくさへきこえ
させ給はぬも又いかやうにかおほしなすらんと人やり
ならすなけかしくて御かたにひとりなかめふし給へる
ゆふくれの空のけしきとりあつめていとしのひかた

」（八八丁オ）

ひめ君おとなひ給ふまゝにけになへての人のゆかりとは
いふへくもあらす大将殿にもうちおほえたてまつり
給てなのめに人のおもひきこゆへくもおはせぬあり
さまなれと宮は心つきなきゆかりとおはせはこゝろ
ひとつにまかせて哀におほしあつかふへきことをも
おほさすかはかりまでほのめき給もた、この御ゆかりと
心え給へは世をそむきなんのちまでなこりもと、め
まうきをた、あらはしてわたしやしてましとおほすをも
しり給はすなに心なきさまのうつくしさをさすかに
哀にも人しれすおほしけりかやうなるうちくの

」（八九丁オ）

御けしきを御めのとたちなとは見しりたれと
とのにもつゆきこえさすへき御さまにもあらすはつ
かしけなる御けしきなれはた、哀に心くるしき御
ことををのくひあはせつ、すこしきる大将殿もすこし
は心えそめ給にし御けしきなれはけにいかにせましと
きにおほしあまりてれいの心ときめきにすこし
ほのめかし給へり
なかむらんゆふへの空にたなひかておもひのほかに
けふりたつ比ときこえ給へりされとれいの中納言

おほすおり／＼はありながらいまさらにいかにしてかはほかさまへももてなしきこえ給はんおほかたのありさまなどはとかくきこえあらはし給はねとなめならずもてなし思ひきこえさせ給つれはかゝりとてもくちおし

うあかぬことありぬへき御行末ならぬとへたてなき

」（八九丁ウ）

御ながらひにおなし心にもてかしつかれ給やうにはいかてかはあらむかたみに心のうちをもさはやかならす思ひなし心くるしうおほさるゝたひことには又むかしをおほしてぬおりなしかすならぬきはとあなたつらはしかりしかとかゝる人のたくひもことになかりければ行末はしふてもえおとしめさらまし物をなど大かた過にしきたをわすぬ御くせの涙もろさたゆへきよもなしあかぬことなくめてたき人を見給なからもかやうなる心のうちもたえすならひにけるしのひかたさの物なげかしさなどをのつからもりなはは、とのみ思ひ聞え

」（九〇丁オ）

させ給へるかひなくひめ君もうちとけにくゝへたておほかりぬへき御心と人しれす見しられ給けり大将にもひめ君をゆかしくくちおしき事とつねにきこえさせ給へれとなをあるやう侍れは今はつゐには御らむしてんなとのみ申つゝそくし給けるあつきほどになりてはいと、おもふあたりのすゝしきよりほかには

たちはなれかたくておきふしもろともにすこし給程に齋院にもれいならすおほつかなき日数へたゝりにけるをおほしいてゝすゝしき夕風まちつけてまいり給へれは人すくなしつかなる心ちしておまへに二三人

」（九〇丁ウ）

さふらひける人もみなうちふしてね入たるにやをらちかくまいりよりて御木丁のそはより見いれ給へはおまへにも御とのこもりたるなりけりふたあひのうす物をたてまつりてひきかつかせ給へは御かほも身もつゆかくれなきに御くしは行ゑもしらすつや／＼とたゝなはりゆきてひたいかみのすこしかりたるわけめかむさしなどなか／＼いとかうこまやかにはひさしう見たてまつり給はさりつれはめつらしくうれしくてつく／＼と思ひしみきこえさせ給に昔より猶おほろけならす

」（九一丁オ）

にほひはさらにならひきこえさすへき人こそなかりけれいてなを我すくせのくちおしうもありけるかなこれをわか物と見たてまつらすなりにけるよあふにしかへはとかやいとかはかりなりけむ人をしもいひをかさりけむかしこの御身にかへんいのちはさらにおしからさりける物を心きよう見ないたてまつりける我心はおほろけならす心つよくもありけるかないまとも御身

をもひたすらなき物に思ひなさはかたうしもやはある
へきくつしおほしつゝけてなけしによりかゝり給て
つく／＼とゐ給へるにうちみしろきて見あはせ給へるも

」（九一丁ウ）

あさましくいきたなさをいかに見給へらむとはつかしく
おほしめされて御かほもいとあかうなり給てやう／＼
木丁にまきれいらせ給ぬるもいとくちおしう人／＼
いまそおきつゝすこしいさりのきなとしつれはつね
よりもいとたへかたきみたり心ちにまかりありきも
えし侍らてひさしくまいり侍らてなむさるは一日も
まいり御らむせられぬはいとくるしく思ひ給へらる、
にこそ御せんにはさしもおほしめいたらぬ物をなど申た
まへはれいよりはあやしう程へつれと御心ちはえしら
さりけり宮もひさしうはとの給はするをれいよりは

」（九二丁オ）

待とをおほしめしけるよかう心ことなる人のしるしとそ
おほしつらむかしとむねうちさはき給てくるしうお
ほさる、そあちきなきや宮はいみしうまいらまほしう
し給へとうへのやかてけふあすわたらせ給はむに
もろともにとのみきこえさせ給へれはけふもうちより
やかてまいり侍はなと申給ですこしほゝゑみてま
ことや人しれす心ひとつに思たまへあまることこそ侍
つれあらふる神もことはりしり給に侍なればにやとは

おもひ給へながら又中／＼なるかたしろをこそ見給へ
しかいてやされとしはしわする、心は神もえつけ給
」（九二丁ウ）

はぬわさにやいますこしあやかりやすくそなりにて
侍そらめにやといかて御かゝみのかけに御らむしくらへ
させむとてうちほゝゑみ給へるけしき大貳かいふ
とてうへの、給し人のことにやときかせ給へと御
いらへもなけれはうちなけきつ、

おほかたは身をやなけまし見るからになくさの濱も
袖ぬらしきりとてはてはれいのしのひかたけに
もらしいて給涙のけしきに又かきくつし心つき
なうおほしなられてなをねふたけなるけしきに
もてなしてふさせ給ひぬるに中／＼なにことにき

」（九三丁オ）

こえさせいてつらむとくやしうおほすそのころ世中
いとさはかしうて道おほちにゆゝしき物おほくやむ
ことなき人もあまたなうなりなどし給へはあはれに
はかなきことをたれもおほさるみかともれいならす
おほされて心えぬさまの夢さはかしう見えさせ給へは
我よのつきぬるにやと心ほそうおほしめさる、にも
つきのおほしまさぬ事をいかてかくちおしうおほさ
らむ大将まいり給へるに御物語こまやかにきこえ
させ給ひていのちもすくせもつきにたる心ちの

するをしらすかほにてのみすこしてこの世をわかるれ

」（九三丁ウ）

さらむことのつみふかうくちおしかるへきを大将の
あつかりのわか宮た、人になさんのほいふかしどき、し
かとむつきにつ、まれ給へる女たいにゆつりをき
もしは一世の源氏のくらゐにつくためしをたつねて
としたかうなり給へるおほいまうちきみのはうに
ゐむよりはあへなむとこそ思ふはいか、さのみひつ、
位をおしむともかきりの命の程は心にもかなふへき
ならぬを見るおりに猶一日にても心のととなるさま
にもなりなまほしくなんとの給はするをいか、はふと
よき事としもおほされんよの中のしつかならぬ事は

」（九四丁オ）

をのつからさのみこそ侍れをの／＼さきの世の契の
ほともき、いれさせ給へきにも侍らす御心の
れいならすおほしめざるらんこそふひんにさふらふこと
なれとそは御いのちなどせさせ給てなをしつかに
こゝろみさせ給はんこそよく侍らめあまり物さはかし
きやうにさふらひなむとそうし給てもけにはうに
ゐ給へきみこのおはせぬはいかなることにかとおほし
なけきけりうち／＼にはわか宮の御すくせのいとかたし
けなかりけること、もてかしつき、こえさせたまふを
大将殿はあるましき事かなとき、給へといかてか

」（九四丁ウ）

さもきこえ給はん女帝もかゝるおりや昔もゐたまひ
けむいかなるへき世にかと人しれすおほすにもかの
みねのわか松とかやいはひをき給けむおひさきのま
ことにかなふへきやうもあらはいかなる心ちしなむさる
ことのあらはしもまことにいけるかひありける身は
おほえなむかしかのつれなき御心にもさりともい
かてかいとむけにはおほされんなど心ひとつにおほす
につけてもさしむかひてとやかくやとかたみに心の
うちともきこえあはする世なくてすきなむは猶
返／＼思ふにもいふにもあまりてくちおしう心うく

」（九五丁オ）

おほされけり中納言のすけ大貳のめのとおなしはら
からといへとおなし身をわけたるやうにかたみに思ひ
かはしたれとこの人の露はかりももらしたる事をは
心よりほかにちらすへきならねとなき御かけの御
らむせん事もありさはかりかくしのはせ給てすき
させ給しことを心より外に我心にしりそめし事たに
かたはらいたかりけり又入道の宮のこの御わたりには
のこりなくしりたまひたるらんとさはかりおほしめし
うたかひたる物をすゑの世にもをのつからき、あはせ給て
思のほかなりけりとおほしめされめとてもかくてもいまは

」（九五丁ウ）

わか宮の御ためにたれもをろかに思ひきこえさせ給へく
はなかりけりとおもへは大貳にもこの御ことをかけても
かたらさりけり夏ふかくなるまゝによのさはかしさも
いやまさりにてたかきもいやしきものくる人すくなけに
なり行つゝ月日あまつほしのけしき空のたゝすまひも
しつかならすあはたゝしきまゝに御かともいと、なやまし
くのみなりまさらせ給へは猶わか世はつきぬるなめりと
おほしめして昔の一寺院におりゐさせ給へきさた
めになりぬ年ころもつきのおはしますましきにやと
くちおしきことにあけくれおほしめしつれとさりとも

」（九六丁オ）

あるやうあらむなどたのみすくさせ給へるを昨日
けふとなりてはなをいとほいなき事におほしめす
事かきりなし世の人もまたさかりの御よはひなり
ち、みかとたにたゝ人になしきこえさせ給てし宮を
又とりかへし坊にすへ給て位をさせ給事は
あるましきこ事となやめと大殿なとはさはかりやむ
ことなくおはせし后はらになのためにたにあらぬさまにて
むまれ給へりし物をたゝ人になし給あるましかりし
ことそかしなとの給をいとおこかましと大将殿はき、給
さかの院にもおほしはなれにしかたさまの事なれと
なのめにもいかてかはおほされん命のなかりけるか

」（九六丁ウ）

うれしき事とよろこはせ給に齋宮もあやしう
さとしかちにてなやましきにし給よしきこゆれは
さかの院などもおほしなげくにあまてる神の御け
はひいちしるくあらはれいて給てさた／＼とのた
まはする事ともありけり大将はかほかたち身のさえ
よりはしめこの世にはすきてたゝ人にてあるかた
しけなきすくせありさまなめるをおほやけのしり
給はてあれは世はあしきなりわか宮はそのつき／＼
にて行すゑをこそしり給はめおやをたゝ人にて

」（九七丁オ）

みかとてゐ給はむ事はあるましき事なりさらては
おほやけの御ためにいとあしかりなんやかていちとに
くらゐをゆつり給ては御いのちもななく成給なむ
このよしを夢の中にもたひ／＼しらせたてまつれは
猶心え給はぬにやなとやうにさた／＼との給はする事
おばかりけれどあまりうたてあればもらしつかゝるよしを
しのひて内にもおほ殿にもそうせさせ給へるにき、
おとろかせ給事かきりなしわか宮の御ことをそ
たれも心えすあやしうおほしける大殿うへなどの
御心中そいひつくすへきかたなきやあらたなる神

」（九七丁ウ）

の御心よせとはさたかにきゝながらもあまりにさるましき
ほとの事は行すゑもいかゝとおそろしきかたもさま／＼

心しつかならずおほさるれとかうき、給てのちは思ひ
ねにやらむ御かとの御夢にもとの、御夢にもとく
かはりゐさせ給はすはあしかりなむとのみうちし
きり御らむすればいと心あはた、しくおほされて
まつ我御みこになさせ給て八月にそ御国ゆつり
あるへきさためになりぬちかき世にかるためしも
ことになき事なりとやおほやけをそりたてまつる
へきやうもなけれとなをいかなる事かあらんといひ

」（九八丁オ）

なやむ人おほかるにたうりをたとりしらぬ女なとはたかき
もみしかきもた、時くも見たてまつらんことのたえぬる
事と思ひなげくさま世になく成給へらむ人のやうに
あまりゆ、しきまでそありけるみつからの御こゝろにも
おほしたちしかたさまいとかけはなれはて、いまさらに
いとあはた、しくありつかぬ心ちそし給へければふさはし
からぬ身のすくせとおほしなけかる、なかも斎院を見
たてまつり給はむ事のいまはありかたう成ぬへき
くちおしさはいまさらにいひやるへきかたなけれはこの
世にいひあつかふらんやうにけにはえあるましき事

」（九八丁ウ）

なれはいとかうしもおほゆるにやあらん又えたもつまし
かりけるにやとさすかなるをこかましさをあらはしてん
ことよなどかたくにさへやすからすわりなき御こゝろの

うちきしかたにもいやまさりになりにたりされと
みかとの御心ちまことしうおもはせ給て一条院に
わたらせ給ぬれはのかれ給へきやうもなう成ぬるに
おほしわひていまは御ありきもあるましけれと斎
院に夕さりつかたしのひてまいり給へりつねよりも
あつさ所せきとしにて御まへにもなやましく
おほしめさるゝにからうして夕風す、しく吹いて

」（九九丁ウ）

たれは人くはしにいてゐつ、月の心もとなきを待
わたるほとのたとくしさにまきらはさせ給てすこし
ゐさりいてさせ給へるなりけり思ひかけすをとなうて
まいり給へればふともえ入はてさせ給はぬ御けはひの
つねよりはちかき心ちするにもいと、心のうちは
かきみたりてしのひかたしかやうにまいり侍らん事も
いまよりはあるましきさまにうけ給はれはこよひはかり
もなを見たてまつりてこそはとてなんいとあまり
おもひかけぬありさまに侍ははすくせなどもつきて
世にえなか、らぬやうも侍なむまたさらすとも見

」（九九丁ウ）

たてまつらむことこよひはかりこそはかきりにも侍らめ
とえもいひやり給はすいとあまりなる御けしき
をもかくのみかきりなき御ながらひともと見たてまつり
しりたるにまいてこの御ありさまはおほつかなうて

一日もけにすくしかたうおもひきこえさせ給はむ事
ことはりそかしなと哀にそみたてまつる御まへにも
見るをあふにてやむへき物とおほしめしるを思ふ
さまにうれしき御ありさまなからおほつかなさはけにと
はかりはみと、まらせ給へとれいのことつ、けてある
へかしき御いらへもなけれは我御こゝろの中は

」（一〇〇丁オ）

はるへきやうもなしあきらかならぬ空のけしきも
猶心つくしに見まいらせ給へるをかつらおとこもおなし
こゝろに哀とやみたてまつるらむあつけにたちくもり
たりつるむら雲はれて月のかけはなやかにさし出
たるに御木丁にはつれてけさやかに見えさせ給へる御くし
のかりつらつきなど等覚の位にさたまるとも見たて
まつらすなりなむことはくちおしかるへきをましてもと
よりこの世のえいようはことにこのます成にし御心なれは
いかてかなのめにはおほされんあさましき御心のうちの
かけくしきかたさまをはいまはいかなりともおほし

」（一〇〇丁ウ）

よるへきならぬとみつのしらなみなる御ありさまを
雲のよそにのみおもひやりきこえさせ給はんにはなからへ
ぬへからんいのちの程なりともいかゝとおほしつ、けて
月のかほのみなかめさせ給ひけり
めぐりあはむかきりたになき別かなそらゆく月の

はてをしらねはとてをしめて給へる袖のけしきもか
きりあるよの命ならぬはけにとやおほしめさるらん
あまりにまはゆければ御木丁をひきよせさせ給て
やをらいらせ給まきらはしに

月たにもよそのむら雲へたてすはよな（袖に

」（一〇一丁オ）

やとしてもみんとなをさりにいひすてさせ給なくさめ
はかりもけに中／＼なるを思ひはなれぬほたしとも
成ぬへしさふらぶ人／＼などをも御らむすることの
たえはてなむを哀におほすとみにもいてたまはす
はかなしこともなつかしきかまほしき御けはひにて
あはれに心ほそけなる事などをたまはすれはみたて
まつる人もかう世にめつらしき御よろこひともおほえす
袖もぬれわたりつゝ月も入かたになりにけりいまはかう
かるくしき御ありきもいとあるましき事なれは
さのみあるかせ給はむもひんなくていてさせ給御心猶

」（一〇一丁ウ）

せりつみし世の人にもとはまほしくそおはされたる
また夜はふかゝらむとおほしつれとあけにけるなる
へし道のほとに恋草つむへきれうにやと見ゆるち
から車とも、あまたやりつゝけつ、行ちかふ御車なども
いたうやつし給て人すくなればにやはかるけしきも
なくちかき程にのりなからくるもおそろしきまでに

おほさるれと思ふかたさまへと御らむすれば御めとまり
給てなを見をくらるゝになにのすかたともみえす
ものくるおしけなるさまともをさしも思ひしらぬにや
やすらかにのりなしてこのころわらはへのくちのはに

「（一〇二丁オ）

かけたるあやしのいまやううたともいとしら／＼しき
こゑにてうたひてすぐるけしき心をやりてないかしろに
思ふことなけなるにつけても
なゝ車つむともつきしおもふにもいふにもある
我恋草はとそおほしけるかくて八月廿日御国ゆつり
ありけるかねてよりめつらしかるべき事に天の下いひふる
しつれといまはとかはりゐさせ給程のありさまなど
は猶うつゝとそおほえさりけるなに事もひとつに
思ひきこえさする人はなかりつれことかきりあれは
おなしさまにうちつれ出入もし給つる人／＼はあさましく

「（一〇二丁ウ）

のみおほさるゝに見なしにや御かたちありさまかくては
又やうかはりてめつらしきひかりさしそへ給てたゝ人
にすくさせ給けんことかたしけなくそ見え給ける
大殿も関白をは左大臣にゆつりきこえさせ給ておりゐ
の御かとの位にさたまり給てほり川の院ときこえさす
は、宮をは皇太后宮とそきこえさせけるかうおほしかけ
さりし御ありさまとも、さるへきこと、はいひながら

一条院の御心さしをろかならずおほししらるれは一品
宮を猶をろかに思ひきこえさせ給ましくほり川の
院にはきこえさせ給つゝとくまいらせ給へくきこえ

「（一〇三丁オ）

させ給へと心より外に時／＼見えたてまつりしたに
やすからさりしをいまはなにしにか雲のうへまて人
わらはれにおこかましきありさまをあらはしはてんうき世
の中もかゝるつみてにこそは思ひはなれめとのたまは
せてまいらせ給はむ事はおほしもかけたまはねは一
条院きかせ給ていとあるましくなを／＼しき御心
なりとむつかりきこえさせ給てたゝいたしにいたして
たてまつらせ給へはいとむつかしくおほしなけられて
そのよにも成ぬるにつらき所おほくはなさしとやおほし
けん姫君のかきりをめのとたちなとそへたてまつらせ

「（一〇三丁ウ）

給てまいらせ奉り給ぬさふらふ女房などもはか／＼しく
しらねはまいてとの人ともはとまらせ給ぬるもえしらさり
けり御かとはれいの御けしきのわつらはしけなるを
いかにとはおほしなからさまかはりたるありさまをいか
見たまはむとはつかしきかたにも心ゆるひなう思ひ
きこえさせ給つゝ心ことにひきつくるひてまつき
こえさせ給つゝ心ことにひきつくるひてまつき
ける御かはりにひめ君なむ一ところまいらせ給けると

そうするをきかせ給にいとあやしくほいなき心ちせさせ給へといてやいとおもはすにかと／＼しき御心

「（一〇四丁オ）

はへは見まうくのみおほえさせ給けりをくりをかれ
給へらん御ありさま哀にゆかしうおほしやらるれは
やかてわたらせ給へりひいなをしすへたるやうにてちいさく
うつしけにてみ給へるを御らむしつけたるまつかき
くらさる、心ちせさせ給いか、はせんかくまでおほしゆつ
りければいと、をろかならすこそは思ひきこえさせめ
すむ人すくなくて内わたりもいとつれ／＼なるへきを
心やりところにも人の思ふはかりにもてなしてさぶらへ
など御めのとたちにものたまはせていと心くるしけに
そもそもひきこえさせ給へるかくみやのとまらせ給にける

「（一〇四丁ウ）

ことを一條院にもき、給てければいと物しうおもはす
なる御心と返／＼きこえさせ給けれといかにも／＼
おほしそめつる事をはなをらぬ御くせなれは御心ちいと
なやましうおほされなとそきこえさせ給ける
内よりも日をへてうらみきこえさせ給へとかやうにても
なさせ給ておさ／＼御返事もなかりけりこうき殿には
日々にわたらせ給つ、ことなとをしへたてまつらせ給に
いとさとくうつくしうひきとらせ給つ、なに事もすべ
れて見ところあるさまにおひいて給ぬへきをあはれに

うつくしうおほしめさる、につけてもあらましかは心やす

「（一〇五丁オ）

きわたくし物にてましらはまし物をなとわすれかたう
思いてさせ給こといやまさりなりかうのみこの御まいりの
すか／＼しからすわつらはしかりつるには、らせ給てかの
なくさのはまもいま、て御らむせぬはいと、御心もま
きる、かたなう物なげかしきをいまさりとてあるへき
事ならねは宰相中将にもまいらせ奉り給へきさまに
のみのたまはすれとれいならすなやましけにし給へは
いかにと見たてまつり給てさやうにそつし給をきかせ
給てもいと、しつ心なうおほつかなうおほしめさる、
まゝにとみによるおと、にもいらせ給はすはかなき

「（一〇五丁ウ）

ことふえさるへきふみともなと御らむしつ、こよなう
ふかして御とのこもるやうなれと心もとまらざりし
みちのほとりともさへおほしいてられてあかしかたし
月いとあかき夜はしつかにおはしますにきまなう
さし出たるを御らんするにもかの夜な／＼にとの給ひし
御けはひまつおもひいてられさせ給ていみしう恋しく
おほえさせ給ふにさやかなる月影もやかてかきく
もる心ちせさせ給ていと、心も空になりぬ
恋てなく涙にくもる月影はやとる袖もや
ぬる、かほなるむら雲はれ待めるをいかやうにてか

」（一〇六丁オ）

たゝいまも御らむすらんとゆかしうなどやうにて
ちかうさふらふ殿上のわらはを斎院にたてまつらせ

給へはけに雲のうへはまいていかにとおほし
めしやらせ給つる砾の月影なれはおかしき御せう

そくなれとまち見給はん御けしきはつかしく
おほしやらせ給へといまは人つてにきこえさせ給

はむもあるましきことなれば

あはれそふ秋の月影そてならておほかたにのみ
なかめやはするとはかりほのかなる御つかひにきくの

ふたへをりものゝのうちき給はせたるをかつきなから

」（一〇六丁ウ）

まいりたるかしらつきなと月にはへてうつくしき
にめつらしき御うつりかさへなへてならぬにほひに

うちかほりたるそいと、恋しくおほえさせ給て

人めもしらす引きよせて涙もおとしけつへくおほしめ
さる御文のけしきなどもた、おほかたにおもはせたる
なつかしさをはるかなからぬさまにいひなさせ給へる
さまなどもさしむかひきこえさせたる心ちのみせさせ

給いでと、御とのこもるへうもなけれはゑむし

ろうのうちとひとりこたせ給つ、うしみつと申まで
に成にけり心やすかりし御ありさまにてたに身を

」（一〇七丁オ）

のちよりこそあさましくおほしうかれたりし御

」（一〇八丁オ）

心ともせぬ世のなけかしさをおほしあつかひしに

いまはいと、さま／＼につけてたちまふへき心

ちそせさせ給はさりけるかやうなる御けしきを

一品の宮御かたに心よせまいらするうへ人なとは

つき／＼しう見なしたてまつりつ、あはれけにかたり

きこえさせるともとより物おもはしけなりし

人くせにいと、宮の女御のまいらねはにこそとおこか

ましくそきかせ給ける御つかひもたえすまいりつ、
かくあさましくほいなきことをきこえさせたまへと

御物うらみのかきりにもあらすすききにし御ありさま

」（一〇七丁ウ）

とのものやうにいつとなくなやましうおほさる、おり／＼
あれはこそえなからもあらし物をと心ほそくて御返など
はかりは中／＼なつかしけにきこえさせたまへと

まいり給はむ事はいと、おほしたえてさまかへさせ

給はむ事をそおほしいそきける宮の女御の御心ちは

たゝならぬさまに人／＼見たてまつりしりて大宮に

もけいしてければこのしのふ草の御ことはかりをこそ
さはかりもきかせ給へわか宮の御事なとはたしらせ

給はぬにかうめにちかくあさやかなる御ことをめつらしく
うれしくいかてかはおほしめされさらんこの御ことの

けしきもすこしなをりかくありかたき御くらゐにも
さたまり給へるにいと、をろかならさりける御すくせ
の程さへ見つへき事と院などのおほしよるこひ
たるさまそいまよりいとこちたかりけるうちにも
かうとさせさせ給ければいとゆかしき事をさへ
そへておほつかなきわりなくおほしめせとこの月は
いむへしなとあれは忍すきさせ給て十月にこそ神
わさなどしけ、れとあなかちなるひまにまいり給へる
御つほねは藤つほなりすみそめにやつれ給へりし

「（一〇八丁ウ）

御ありさまにたにみたらし川のかけにもならひきこえ
させ給ぬへくありかたりしを紅葉のにしきにたち
かへてまいり給へれはいま一しほのみところもまさり
給へるにおほつかなくてすくさせ給つらん日かすもうら
めしくそおほえさせ給けるかゝる程はすこし御心も
なくさむやうなるに又いかにそやた、それかとまで
おほえたてまつり給へる御かたちはひもふと
おもひ出られさせ給かたつたはまつ御むねふたかり
てこの世のうちなから見たてまつらすなるへしとは
思ひかけさりしわさかなとおほしつゝくる程いかはかり
見れともあかぬ御ありさまをさしをきてつくづくと
なかめいらせ給て

「（一〇九丁オ）

かくこひんものとしりてやかねてよりあふ事たゆと
見てなげきけむとおほさる、につけてもくらへ
くるしき心のうちは猶いとわりなしさるはさまこ
とになやみ給へるけしきのらうたけさなど
にもたちならふ人／＼のあらましかはいかに心より外に
くるしくむつかしからましことをそいたくうるさう
なりにけるもきしかたさへうれしきまでたちはな
れすおきふしかたらひきこえさせ給へりとし比いか
「（一〇九丁ウ）

さまにしてたまさかにかよはしみたてまつるわさもかなと
おもひねかひ給へる上達部みこたちなどかくおほや
けさまにならせ給てはいなひさせ給はぬやうもあり
なむわづらはしかりつる一品の宮さへかく世をそむき
給ぬへかなるはあこの御すくせのめてたかるへきなりと
をの／＼御むすめともをいと、もてかしつきて大貳の
三位などして御けしき給はる人／＼おほかりける
そのなかにも人しれぬさまにてたえ給にしも又さまで
はあらねとさやかなりし月影もしはともしひの
ひかりなどやうにてもすこし心にくきあたりともは

おほつかなきもなくゆかしき事なかりし御心の
うちなれはかくていつしかとかる／＼しくそれをなど
とりわかせ給へきならねはたゝかくともなかくしも

「（一〇九丁オ）

えあるましきありさまなれはなに事もいとつ、
ましきをいましはしもなからへはさやうにてなとい
らへさせ給ものから人しれぬ心のうちともはいと
うらめしく思ひいて給わたりもあらむかしいとかく物
なげかしき身ならざらましかはなとかはかゝるおほかた
なるありさまにては見ざらましとさすかに心くるし
くおほしやらるゝところ／＼もあれといてやこの世も

」（一一〇丁ウ）

あの世も思ひしことはたかひはてぬるかはりには
かうなからもさやうにみたりかはしく心をわくるかた
たになくていま二三年たにすくしてはいみしからん
ほたしともをぶりすて、世をそむきなんとおほし
けるしも月には五せちなといふこととにより女御
まかて給ぬへきをくちおしうおほしわひつゝなとかく
やすからぬ身となりけんとのみおなし事をのたま
はせつゝゆるしかたけなる御けしきなれとけにか
きりある御ことなれはさのみもえおしみはてさせ
給はてまかて給ぬる名残もいとわりなきそあまり
まきる、方かたなきわ（は）さにこそとおほしられける
はかなくとしもかへりてかものまつりの程にも成ぬ
れは御けいのこせむともつかひなとさせ給
にもすきにしかたの事ともおほしいてられて斎院の

」（一一一丁オ）

のれうともなとさま／＼にせさせ給さま心ことに
めてたしなともよのつねならぬさまにしたてさせ給て
なをおしみ人たのめなるあふきかなてかくはかりの
契ならぬにと御れうなるはへちなりつゝみかみに
かきつけさせ給ても院などもこそ御らんしつくれと
おほしかへせとしとろもとろにやおほしなりぬらん
ひきもかへさせ給はすなりぬ御つかひは五位くら人
にやあらむおほしやらせ給しもしく院のおはします
ころなれは御つかひかひ／＼しくもてはやさせ給
あふきとものめもをよはぬをあまりおほやけしからぬ

」（一一二丁オ）

物ともかなどめてさせ給にまたへちにて心となるは御
まへのとみゆるにかきつけられたると、も御らむし
つけられといととかはかりおほくの年月をへておほし
こかれたまふ御心ともしらせ給はねはた、おほかたの
ことをのたまはせたるとのみ御らんして御てをのみ

わたりつねよりも恋しくおほしやらせ給におほかたの
殿上人などの心／＼にしつ、あまたまいらせしあふきとも
はさる物にてみつから御れうなとは我御心と、め
させ給つゝたてまつらせ給しをのみもたせ給へしかはおや
やけしきゑところなどにてのあら／＼しきにはあらて
さるへきくら人ともうけ給て日ことにかはるへき女房

」（一一二丁ウ）

めつらしからん人のやうに袖のいとまなくをしのこひ
つ、めてゐさせ給へり斎院はなまくるしくおほしめ
さるれと御返とくくとのみきこえさせ給へはおほ
しもあるへすた、

あふきてふなをたにいまはおしみつ、かはらは風の

」（一二二丁ウ）

つ、くやあらましとあるを御らむしてもれいの心をのみ
そつくさせ給まつりの日は近衛つかさの使のした、
まいるをうらやましく見をくらせ給て
ひきつれてけふはかさししあふひさへ思ひもかけぬ
しめのほか哉とおほしつ、けてなかめさせ給へる御
まみなどのなを国王ときこえするにもあまりて
けたかくなまめかしく見えさせ給へりかくて藤つほの
女御みけしきありて院のうちところなきまでほう
しもそくも世にあるかきりはたちこみてゆすりみちたる
に内の御つかひあめのあしよりはしけ、れと行かへる

」（一二三丁オ）

ほとも心もとなくいかにくとおほしめしやらせ給に
いとたいらかにておとこみこにてなときかせ給御心ちをろ
かならんやはまいてめにちかく御らむしあつかひきこえ
させ給ふほり河の院の御けしきことはりもすきてか
きりなき女御の御さいはひと見えたり一品の宮のひめ
君の御ことをたに世の人はしらねはた、これをはしめ

たる事と思ふにいみしくともわか宮の御おほえはいまは
いかにそはうにゐ給はむ事もさはいふともまことの当代の
今上一の宮をはおとしきこえ給はしなとまたしきに
き、にく、さためきこえさするをさかの院にはけに

」（一二三丁ウ）

いか、ときかせ給そおこかましきやこの宮の御うつくしさの
なのめならむにてたにうちくのことしらせ給はぬ御心とも
にはけに行末も思ひおとし聞えさせ給ひかたけなる
御けしきもことはりなりた、大宮院などの御ひさの
うへにとりかへくあつかひきこえさせ給へるさま
けによりの人の物いひもかなひぬへきにやと見えたる
大貳の三位などうちにまいりつ、か、る御けしきになどそう
するをきかせ給にも若宮の御おりよそのことにうちき、きて
すくし、にまれく中納言のすけのほのめかしいてたりし
よりあさましくかなしくうつし心もなく成そめてかの

」（一二四丁オ）

たつの一こゑき、つけたりし雪のよの事もまつおほし
いてらるゝにかはかりも我物と見たてまつるはあるへかりし
事かは我年ころひとへに哀にかたしけなく心くるしき
かたにも又あかすくちおしき人の御ことの年月ふれとす
こしも思ひなをされぬ心のうちのかはかりにもとりあ
つめていま行末いみしき人いてくともひとしうたに思ふ
へくもあらぬ物をいまよりかくさへ人のいふらんをもしみ

にと、めてかのわたりにも聞給やうもこそ心くるしうお
ほしつゝくるおりしもあたりもひかるはかりなる御かほつき
にてさしいて給へるをひきよせたてまつり給へはゆら／＼

（一一四丁ウ）

と女のやうなる御くしのきよらなるかきなてつゝほり川の院
には二の宮をうつくしかりなつき給て宮をひさしく
見給はぬこそ心うけれなまろよりほかにかきりなく思ひ
きこゆる人のなきこそあはれなれとの給はするをとしのほと
よりこよなくおとなひしつまり給へるけにやけにとお
ほすにすこし涙くみてまゆのあたりもうちあかみてう
つふし給へるかしらつきかみのかりひたいつきなとは
かの昔ほのかなりしほかけにもいとよくおほえ給へりかし
と御らむするに我も涙こほれさせ給ぬかやうなるあり
さまにつけてもさりとも見なおし給心のほともあり

（一一五丁オ）

なまし物を行末はたかゝる人もあれはうき世とのみおほ
さるへくもなかりける物をいかにしなしてし我心そときのふ
けふのやうにくやしく哀なる事そ猶かきりなき御すゝり
のあきたるふてをとらせ給て

かなしさも哀も君につきはて、こはまたおもふ

ものとしらぬをとか、せ給て見せたてまつり給へは
さすかにうちゑみ給てこれにはかならすをとり侍なんかし
とてうちそは見てかき給手つきなど女宮にそせま

ほしき

ことはりもしらぬ涙やいかならんわれよりほかの

（一一五丁ウ）

人をおもはゝとかき給へる御てのうつくしさをことはりそ
かしたれにに給てかはなに事もなのめにと御心にも
ことはられ給にこのしらぬ涙そ哀におほしめざるれと
さかの院のおはせん程はこの御心にもいひしらせ奉らしと
おほすなるへしさしも御心とまらぬわたりにたにおとこ
みこむまれ給へるに行幸あることはつねのことなるに
これはまいて大宮を見たてまつらせ給はんこともいと
かたければさま／＼に心もとなからせ給てなぬか過るま、
に行幸ありひさしく見たてまつらぬ事をなげく
人たかきもくたれるもあまたありてこの程にとたち

（一一六丁オ）

こみたる物見車ともかち人ともこちたきまでおばかり
ひさしく御らむせさりつるしつのいほりとも、又たま
さかにたちより給しいもかすみかのま木の戸ととも、
哀にすきかたくみいれさせ給にゆゑなからぬけしき
しるくさはかりにやとみゆるさしきくるまとものまへは
いかにつらき心とみるらむとおほすもくるしくてしり
めはかりた、ならてすきさせ給をけにあるへき物をと
中／＼にあかすくちおしくおほさる、人／＼そおばかりける
まちつけきこえさせ給へる院のうちにもかみしもめ

つらしき御みゆきを見たてまつりよろこぶにまいて

「（一一六丁ウ）

大宮はいま／＼しきまで涙もろにおはしますなにやかや
と御物かたりしはしはかりにてそわか宮見たてまつりには
わたらせ給けるいひしらすうつくしき御かほつきなど一の宮
にたかひきこえさせ給はすおなしさまにてふさせ
給へはものとしらすとかやのたまはせしかとけにこれも
をろかには思ふましかりけりとそ御らむしける
女御はなやましけなる御けしきにてあえかにほそり給
へりと、心くるしくあてにらうだけなることまさり
給て見をきかたくおほしめざるれと暮ぬれはかへら
せ給ぬ院の別當けいしともなとれいの事なれは

「（一一七丁オ）

かゝぬしけりかく思ふさまにめてたき御ことをきかせ給
にも一品の宮は物のみおほしなげくにや御心ちも
まことしうくるしからせ給てつるにあまにならせ給ぬる
を一条院にもうちにも返／＼くちおしく哀におほしめす
にいくらはかりの日数もへてうせ給ぬれはいと
あさましくかなしくおほしめすなににも内には心とけて
すき給ぬるを心くるしくかはかりみしかりける御命の
ほとをなとてさしも見えたてまつりけむなとれいの
過にしかたしのふ御くせなれはつねよりことなる御なみた
もろざなりされと宮の女御后になしきこえさせ給て

「（一一七丁ウ）

「（一一八丁オ）

わか宮ひきくしてまいらせ給て御らむするにはさのみ心ふ
かき御心といひながらもやうの物といかてかしつみいらせ
給はむ露はかりわくる心なくてこの世にはすきはて、
後の世にもおなしはちすにとのみいひちきらせ給つ、
あけくれさしむかひてたゝ人のやうにてすぐさせ給
御ありさまいにしへにたとしへなきもた、この御さいはひ
のなめならさりけると世人／＼いひ思ける月日も
はかなくすきて宮の御はてなどいふこと、もすきて又の
年の秋冬はおほはらの春日平野などの行幸あり
はしめてめつらしき御みゆきなるにそへてもみかとの

「（一一八丁オ）

御かほかたちありさまこの比さかりにねひと、のをりはて
させ給てすこしもなのめならん事はあかすくちおしかり
ぬへき御ときなれはにやあなたちに物このみする人のみ
おほくなりて上達部殿上人などの馬くらのかさりもとねり
むまそひのなりかたちなども世にめつらしきさまにもと
たれもいとなみ給へれはみどころはこよなきをいかなる
人か見ぬはあらんほりかはの院にはひわたらせ給し程たに
たちこみたりし物見車のこちたさなれはまいてたひ
ことがあかす見奉らまほしきまゝにれいにもたかひて
心あはたゝしきみち大ちのさまなりかもの行幸は九月

「（一一八丁ウ）

つこもりなれは野への草とも、みなかれ／＼になりて
みちしはの露はかりそみしにかはらぬ心ちしけるこゝろは
ゆかすながらもあまたたひ行かへりしそのかみはなし
事をかはおもひけんと恋しくおほしいつるにれいのかき
くらさる、御心のうちをもしらす河わたらせ給ほとはかよ
ちやうのこゑ／＼もき、にくきを身もなげつへき川
の契りをなとかくいふらんときかせたまふ

おもふ事なるともなしにいくかへりうらみわたりぬ
かもの河なみなめける心のほとはきしかた行末こよ
なくおほゆるを露はかりおほしとかめすかうあるましき

（一一九丁オ）

さまにさへしなし給へる神の御心はへをおもへはかたしけ
なくありかたく思ひしられ給をひとかたしも見かたう
成給にけるのみそなをさらうらめしくおほえさせ給
神のやしろに御はらへつかうまつるにもすきにし年

たて給へりし御願かなひ給てけふまいらせ給たる

さまいまより後代を久しくたもたせ給へきありさま
なとき、よくいひつゝくるはけにあまる神たちも

みたて給らんかしきこえてたのもしきをさしも

なかうとはおほしめさぬ御心の中にはうれしかるへくそ
きかせ給はさりける

（一一九丁ウ）

やしまもる神もき、けむあひもみぬ恋ひまされてふ
みそきやはせしこみに思ひしことはみなたかひて

よかぬわさもかなた、いまなに事をしていかやうにてか

おはしますらむなと見たてまつらまほしうおほしめさる、

にたましゐもはやくあくかれぬらんとまでかへり見させ給

こそあんめれとそおほしめしける十月かみの十日はひら
野の行幸なりけりこのたひは紅葉のさかりにては、
そはらおかしうわけ入せ給に山はみなくれなゐなるを
見わたされ給にも忍つゝも御らむせぬところ／＼は
すくなかりしかは北山のあたり報恩寺は袖ぬらす宰
相のかよひ給しところなとはおかしかりもおほし出らるゝに
梢の色も心ことに見やらるゝを煙もところ／＼に
たちふもとをこめたるきりのへたてもたと／＼しきは
（一一〇丁オ）

中／＼いと、恋しき事おほく御らむしわたすに斎院の
わたりの紅葉もいみしうさかりにて色／＼のにしきをひき
ちらしたるやうにみえわたされたるに嶺のあらしあら／＼
しく時／＼聞わたしてちりまかひたるなとゑにかゝま
ほしきをさしも思ふあたりならすとも心はかりはあくかれ
ぬへきをいと、ひとつかたにのみなかめいらせ給へり
神かきの松の木すゑにあらねとも紅葉のいろも
しるく見えけり御らむするにもかひなしふなおかの
あけくれさしむかひたりしをめつらしきともとおほし
なくさめてたちかへらせ給もあかすわりなくてひき

（一一〇丁ウ）

よかぬわさもかなた、いまなに事をしていかやうにてか
おはしますらむなと見たてまつらまほしうおほしめさる、
にたましゐもはやくあくかれぬらんとまでかへり見させ給

あはとみる身はふなをかにこかれつゝこゝろはゆきぬ
こはゆけるかはなどやうに野山川のそこを御らんするに
つけつゝもおほしみにしかたさまの事はさらに寔すれ
させ給はすかつみる人の御ありさまのめてたくおもふさま
に御らむせらるゝにつけても我御すくせのめてたかり
けるはかた／＼につけつゝなのめならすおほししらるゝ
物から御心の中はさらやすかるへくもなかりけり

「（一二一丁オ）

こき殿にひとりすみ給ひめ君の御事は心くるしう

おほしあつかひつるに宮うせさせ給てのちはほり河の院
も大宮もつねにわたらせ給つゝ見たてまつらせ給にいと
はかなうきかせ給し道芝の露のかたみとまきらはす
へうもあらすなまめかしうおかしけなる御かたちはわたり
けむは、君の御さまさへおほしやられていとあはれに
かたしけなう御らんせらるれはいまゝてかる／＼しき
御名さしをもあるましき事なるを一の宮の御けん
ふくあるへきにやかて御もきのことおほしいそかせ給
けりなに事もおほやけさまにあらすほり河の院の

「（一二一丁ウ）

御いそきなれは世のためしにもすはかりなる御いそき
のありさまなりときはのあま君のむすめのこたち
よりほかには宮の御もてなしのいとあなつらはしけに
おほしめしたりしかはさふらふ人／＼もうち／＼にはなま

いかにそや思ひたりしかといまはかみしもさなからこの御
かたにまいりあつまりていとやむことなくてまことしき
人／＼のあまたさふらふ一条院にもこ宮のあはれにおほ
しあつかひたりしこと御らむししりにしかはかたみに
もたれをかはとおほしめしてかゝる御いそきをもき、
はなたせ給はす心となる御さうそくあふきたき物

「（一二二丁オ）

などやうの物をそ御心さしのしることにてたてまつら
せ給けるその夜のありさまかきつゝけすともおもひやる
へし二宮の御はかまきもこよひなりければよろつさし
あひてさま／＼のめてたき事のみあまりなればせう／＼
まねひたらむは中／＼そこなはるゝ事もありなむかし
よろつの事きよらなるなかにもさま／＼おとなひさせ
給へる御ありさまとも猶すぐれて見ところおほく
見えさせ給けるそのなかにも一宮の御あけまさりの
ゆ、しさはなをいつくにいかなりし人そとむねうちさは
きて哀あさからぬ御心さしすくれたりこの道芝の露と
かすならすおほしあなつりしなこりとも見えぬ御あり
さまをこよひやかて一品になしたてまつらせ給つ思ひ
かけすあさましかりし道ゆきすりに心うかりし法の
師のあしもとなたゝ、いまの心ちしてめつらかにも哀に
もおほしめしいてらるゝ事おほかるにこよひの御あり

さまを見給はぬくちおしさをそなを／＼あかすおほし
めさる、この世はとかやありし夢さめてもしいかやう
なることのありけるそとはしめて心えかたうおもひ
まとひし暁よりはしめて我物とみるへきやうも
なかりしによりいか、はせむにおもひよはりて見たて

」（一二三三丁オ）

まつりし人さへひとりにうちまかせて我はうせぬるも思へは
さま／＼にはかなうあはれるなる世なりやなどとりあつめ
涙こぼれぬへきをいま／＼しうおほしかへすへかめれと何
事のおりもまつ心のうち物あはれる事そたゆへく
もあらぬ御ありさまともなる一宮をは兵部卿宮とそ
きこゆへきなめるまたの日そさかの院へまいり給
へる御まへにてよろつにつくろひきこえさせ給へる
御さまのうつくしささらにねひゆかん行末をしはかられ
てあまりゆ、しきまで御らんせらるゝをさりともむけには
見はなちきこえ給はしとたけうおほさる、物から

」（一二三三丁ウ）

いかはかりの心にて年月ふれとかはらぬ御心のつらさなる
らむとけふは猶すこしうらめしさもたくひなけれは
雲のかよひちあとたえて後はいと、やるかたなき心
のうちはかりにおほしめす御丈なれとこまやかになり
ぬよへのありさまひとり見侍しも哀なることおほくなど
やうにて

年つもるしることなるけふよりはあはれをそへて
うきはわすれねさりともと見え侍ありさまをけふは
御らむしいれさらんもあまり人めわか／＼しうなとか、せ
給てれいのしのひてをときこえさせ給へはひきかくして

」（一二二四丁オ）

たち給ぬるなこりも涙ほろ／＼とこぼれてながめさせ
給さかの院にもまちうけ奉らせ給ていか、はなめに
見たてまつらせ給はむかくてはいと、内のうへに露
はかりたかひきこえさせ給へることなきをあさましく
かのあまてる神のほのめかし給けむこともあるやうあり
けることにこそとおほしやるかたさまにもこ宮の御ため
そいとおかしかりけるれいのさほうにはいしたてまつり
給て入道の宮の御かたにはた、まいりてさふらひ
給そ哀なるや忍てありつる文まいらせ給をかゝる事
をほの／＼きこえて、さゝめきあやしかる人／＼おほく

」（一二二四丁ウ）

なりにたるにいと、さま／＼物をおほしなくことい
みしきにけふの御さまはいと、こと人とさへおほえ給
はぬ面影のはつかしさへわりなくて御らむすへきやう
もなきにましてけふしも哀そへさせ給へきにもあらす
さき／＼はひたふるにせめきこえさせ給し御返もい
まはかうのみくるしけなる御けしきをみしり給へは
なをともえ申給はぬものからけふはかならすとの給は

せつる物をいかにほいなくおほしめさむとかた（）にくる
しうおほいたるをいつものめのと中納言のすけなど
はかりそ見たてまつりしりたれは人しれぬ涙とも、

「（一一五丁オ）

おとしけるいとうらめしうおほされてうちにかへりまとい
給へはうへは藤つほにそおはしましけるやかてそなたに
まいりたまへれははしつかたにいてさせ給てさて院はい
かゝの給はせつる宮の御まへには御らんしいれ給つや
などの給はせてつきせずうらめしと思ひきこえさせ
給へるさま院のおほしめしたるよりはこよなうまさらせ
たまへるを物の心しり給へるまゝに我心もをろかなならす
おほしらるへし御いらへきこえさせ給さまも程よりは
おとなしくいまよりはつかしけなる御さまにていたうしつ
まり給へるけしきなども今よりはこのわたりにならし

「（一一五丁ウ）

きこえむもわつらはしくおほしめさるれはれいのやうに
うちにまいりたまへとものたまはすありつる物はいか、
なりぬるなど思てそきこえさせ給まいらせ侍ぬと
はかりにてかひくしき御けしきもなかりけりと見ゆる
けしきもつねの事なれとおほかたにつけても今は
いとかうしもひたやこもりになさけなくやはもてなし給
へきと人わろきまでつらうおほしめさるゝにいかて
いまよりたにかはかりもきこえさせおとろかさしと返く

おほしかたむれとた、いまもさしむかひ給へる御あり
さまのなのめならぬ哀のゆかりにはなにかそれしも恋

「（一一六丁オ）

しくいか、おほいてきこえさせ給はさらんとはかり物も
の給はてうちなかめさせ給て猶たちかへる心
かなと御心にもあらすしのひやかにいはれさせ給ぬるを
中宮はほのきかせ給て猶もてはなれ給へる御なかには
あらさりけりと心えさせたまひて

たち帰りしたはさはけといにしへの野中の水は
みくさゐにけりいかに契しなとてならひにかききすさひ
させ給にちかくよらせ給へはすみをくろうひきつけて
おましのしたにさし入させ給をかはりなるなからひに
さへ猶はかなき事につけてもへたてかほなる御心は

「（一一六丁ウ）

あまりなるをならはし給なめりなとてひきいて御
らむしてありつる忍ことゝもの御みとゝまることやま
しりたりつらんあまりまきるゝかたなけれは心の中も
見しられ奉るそかしとおほしらる

いまさらにえそ恋さらむくみもみぬ野中の水の
ゆくゑしらねはとかきつけさせ給て見とかむへき
御ふてのすさひにはあらさめれと思ふ我心には何事に
かと心ときめきしてかきて侍そとて見せたて
まつらせ給ものからかやうに人にもいらせたてまつり

我もはかなきくちすさひにあるへかりし人の御うへ

」（一二一七丁オ）

かはなどおほすに我やまちのいとおしさもれいのつみ
さり所なく涙さへおちて人にもとかめられさせ給ぬへき
まきらはしにさかの院のあなかちにおほしたりしあ

まりになへてならす思ひかしつき給へりし宮の御

うしる見にとさへおほしたりしかといまゝて世にあるへき

物ともおもはさりしかは見しらぬさまにてやみにしこそ

おもへはひかくしけれ昔よりしてけふいまにもこのかたさま

につけてはいきなから佛になりぬへかりける物を見たて

まつりそめしよりこそはこの世をすてかたき物とおもひ

なりにしか哀にあちきなき事なりやかゝれはこそは

」（一二一七丁ウ）

仏も止ま不須説との給ひけれどそ涙くませ給ぬる

兵部卿宮は月日のすくるまゝにうへの御かたちありさまに

たかひきこえさせ所なくめてたくおはすれは春宮に

まいらせんとおほしつる人／＼の御むすめともかゝる御

かたちありさまをよそにはいか、見たてまつらんとお

ほしなりつ、内にもほのめかし申給なかにもかのよし

の川あまたたひいさめ給ひしいまひめ君の御よすかと

なり給し宰相中将はこの比一の大納言にて春宮大

夫かけてそ物し給ける西国のしゆりやうそとては、

しろにいりもまれ給しかとやかてそのあたりをとりはな

」（一二一八丁オ）

ちて又たくひなく哀なる心さしに思ひかしつききこえて

しとけなくそきおとし給し髪もおふし給しかはかたくなし

かりし御心もをのつからもてかくされてあまた年も過に

ければいとおかしけなる御子ともおほかるなかにおほい君

すくれ給へるを大納言はいかにまれ春宮に奉りてか

ならすきさきにすへてんとおほしの給をは、君は昔の

ほいたかひてみかとをもえ見たてまつらすうとくしく

成にしかはりにこの宮をたにけちかくてこそあらせたて

まつらめとからうして御心つよくのたまへはまれ／＼はかく

しくおほしよらむ事をたかへきこえしと大納言もおもひ

」（一二一八丁ウ）

なりに給へるにや一品宮の御かたよりつたへそさせさせ

給ひけるかの几丁のほころひあらそひしけはひともゝた、

きのふけふの事にのみ思いつるを我も人もかやうの事

いひかはすはかりのすゑ／＼あまたたち出給ふまで成に

けるよとあはれにもおかしくもおほしいてらる、心のかきり

もてかしつかるらんひめ君のありさまなどもいかならん大納

言はおほかたのをきてはかりこそあらめうち／＼の事母君

のをしへのまゝにそあらむかしそれを見くるしとおもはむには

大納言さてはありなんやなに事もあら／＼しく心をやり

てうちはやりたる人からなればそかしとおほしやらる、たに

」（一二一九丁オ）

いとうしろめたくわりなきに琵琶のねひきつたへてや

あらむと思ひやらせ給はひとりゑみせられさせ給てかひ／＼

しくそいらへさせ給はさりけるいとわかき程はあまりさた

まりゐん事はくるしうおほえしをいま一とせ三年すきなは

みつからもえかくてもあるましければさやうの程にたれも／＼

まいらせたまへとそのたまはせけるきりつぼを母宮の

御しつらひのやうにめてたくきよらにせさせ給て女房

などのかたちすくれたるかきりあまたさふらはせ給てそ

おはしまさせ給けるほり川の院にもうへのはやうおはしま

し、かたにおなしさまにいてさせ給おり／＼はもてかし

」（一二九丁ウ）

つき、こえさせ給へるさまなのめならず中宮もかの御心

さしありてつくらせ給し三条殿にいまはいてさせ給へは

この院に一品宮のおはしましところをそ返／＼みかき

たて、あした夕のいとなみにはこの二所の御事をおほしめし

たりさるはわたくしの御心ともには二の宮の御思ひには

ならひ給へきやうもなけれど兵部卿宮の御ことを

内のなをすくれて思ひきこえさせ給へれはうはへかりは

おとさせ給ことはなし一品宮もいまおとなひさせ給に

たるを春宮はむかしよりの御心さしかはらすいまは御つかひ

しけくまいりつ、うらみきこえさせ給へれとこ宮の御

」（一二三〇丁オ）

ありさまなどをおはしあはするにもいてや猶宮たちは

た、心にくくてやみ給はんのみこそめやすかるへけれ

わか御心の程よりは我なからくらへくるしく心くるしかりし

心中そかしまいてかうなからさりける御命の程にては

かうやうに思ひいてたてまつる人なくてすき給なましいかに

めてたからましとおほしめはすか／＼とおほしたつへきさま

にもあらさりけりさるは御は、方などにつけてもたの

もしく思ひうしろ見たてまつり給へき人もなくて行末

くるしかりぬへきさまなりとあすのふちせをしらぬ程

はなにかいとたちまちにとしもいそかせ給はん御めのとたち

」（一二三〇丁ウ）

さふらふ人／＼よりはしめ心はせすくれうしろやすかりぬへき

さまとなるを御あたりちかくも候はせ給などしておほかた

いとけたかくもてかしつきこえさせ給へるさまなへて

ならすいとしもなかりし宮の御おもひなりしかと人のむすめ

の御事をさへかくもてなしきこえさせ給こと、一條院を

はじめたてまつりて世の人もありかたき事にきこえさせ

せしかとこの御もきの程よりそかくにこそありけれなど

ことはりに思ひけるかのゆくゑもしらすはてもなくおほし

まとはせし三河守もその、ち人知しれぬ御心のうちはかりにはこよなくおほしへたてしかとは、北の方おほえすくれ

たるゆかりにはなしにかは思事のすこしもたかはん年

はいとわかくて大貳にも成にければやんことなきめとも

あまたひきくして思ふさまにてくたれとむかしの事とも思出て物あはれるにからとまりにてはたこといみもしあへすうちながれ

帰こしかひこそなけれからとまりいつらむかしの人のゆくゑはもの、おりことにありかたりしさまたちなどをうちとけかたらふ事たになくてやみにしくちおしさ又人をいたつらになしてしつみふかさなどもわすれぬにこの御もきにのほりあひてかく見ならへての世にも

（一三一丁ウ）

さにこそありけれといひさたむるにあさましかりける山ちも思ひあはせられていましも心のうちにかしこまりなげきつ、かけてたに思出でしのふこともせしかたしけなしと思ひ成にけりときはのあま君はうせにしそかし心ちかきりにおほえけるおりいとちいさくおかしけなるこからひつをとりいて、これあなかしこをろかにし給はてしのひて宮に御らむせさせ給へ御うふきぬやむかしの人のかきすさひ給へるゑともなどのやりすてんかおしかりしともをとりをきたりしなりむけにその人の御ありさまとてきかせ給事なからんよりはもの、心しらせ給なむに御らん

（一三二丁オ）

かり○つ、なくなりにしありさまなときこえさするつてにしかくのものこそさふらへと申いてたるをゑをなんいかき給しなむとさきくもきかせ給てあれをたに御かたみにみはやなどおほしぬかひつれはいみしうゆかしとおほしたるもことはりなれは御几帳ちかくひきよせなどしてとりいてたり御うふきぬのありけるをまつとり御らむするに我きたりけん物ともおほされす物けなく哀

（一三三丁ウ）

けなるにつけてもかはかりの程をひきはなちてもさすらはせ給けんほとのかなしきうらめしさもいひしらすかなしくおほさるゝに

人しれぬいりえのさはにしる人もなくくきするつるの毛衣とさへかきつけられたるを見つけ給へる御心ちいかはかりかはおほされつらんいと心くるしきけしきを中将はなにに御らむせさせつらんいますこしおとなひさせ給てもの、哀ものとむはかりにてこそとりいつへかりけれとさへおもへとも家もしのはれすかなしき事おほく見ところあるゑとも、ゆかしけれはかたはしこせせんと思ひしきとてむすめにあつけたりけるをうせて四十九日などて、まいりたるにつれくなるひるつかた御まへに人かちにもなけれはあまきみのゆかし

（一三三丁オ）

みしく

とてまいりきつるなりおなしくはき、所あるはかりをしへ
なしたてまつらんとの給はすれとれいならぬ御けしき
にてまきらはさせ給へはおとろかせ給てねいならぬおほさ
る、かなときこえさせ給へと御いらへもなくてた、
うつふさせ給へるにこほれか、りたる御くしのか、りかほやう
なといと、らうたけさまさらせ給へるもた、むかしの人と
おほえさせ給へりあまりあやしからせ給もかたはらいたけ

」（一三三丁ウ）

中将そかのときはにさふらひしおい人の昔みえ侍けるあや
しのほくともをとりをきてさふらひけるをうせ侍にし
のち御らんせさせよといひをき侍しを思ふ給へいて、
つれ／＼のなくさめにとりいて、侍つるあはれけなる事
ともさふらひ侍けるにやとそうすればけにさもおほし
ぬへき事にこそはむかしの人のかはりにはさゝのわき葉はな○も

たのむへきさまにいひ契しかひなくかきりの程をしも
しらさりけるこそはいなき事なれのちにこそみちすゑ
もいひひてたりしか日つゐてなどえりけるとかいま一と
せうそこをたにせてくちおしきことなりやそこのさ

」（一三四丁オ）

ふらはぬもつねのさとかちにめなれてとかめさりけるよ
この御ありさまもいみしくゆかしけにものせし物をなど
の給はせてありつるこからひつをひきよせさせ給てこれ
や昔のあとならんみなはかなしとかやひかる源氏の、給

ける物をとはのたまはすれと御らむするにみつから
かきあつめ給へるゑともなりけり世になへての人の
事ともみえすありかたかりけるふてのたちとはいつ
れもみ所ありてめてたきなかも我世にありける事
とも月日たしかにしてるしつ、日記してさるへき所／＼は
ゑにかき給へり我時／＼も御らむしそめし程よりの事とも

」（一三四丁ウ）

はいますこしめのみとまらせ給て哀にかなしくおほしめ
さる、事かきりなしみつからのありさま我御かたちなども
たかふことなくてうちしのひつ、たちより給しよな／＼の
月のひかり風のをとなひよひあかつきの空のけしきなども
わか心におかしくも哀にもめとまり心をしめ給けるおり／＼
をかきあらはし給へるよろつよりもかの御心にもあらす
つくしへくたり給ける程のありさまはめのみきりふた
かりてはかくしくたにえ御らむしやらすうたとも、扇に
かゝれたりしなどおなし事なれはと、めつときはに
帰て心ちすこしおちゐるまゝにおもひつゝくることおほく

」（一三五丁オ）

くちおしかりける身のすくせいとかなし我とはおとろ
かしたてまつるへきやうもなく人はそこのみくつとのみ
こそき、なし給けめいまは世にある物ともおほされしわ
すれ給ぬらんかしなど思給けるほとにや
わすれすは、山しけ山わけもこて水のしたにや

おもひいるらんこの宮むまれ給てのちいと、物をおもはしさまざりていといみしく心ちもいくへうもおほえさり

ければ一品宮にわたしたてまつりてんと思ひなり給ひけるありさまかなしともよのつねなり御むかへにちある人など給はせたれは心ちのくるしさをねんしてうちゑみ

」（一三五丁ウ）

つ、物かたりもたかやかにし給をかほに涙もあへすほろ／＼と
こほれか、れは袖をかほにふたきてえたに見たてまつら
ぬにあま君御心ちいと、くるしきにいとかくなおほしいりそ
たいらかにたに物し給は、忍つ、はつねに見たてまつり
給てん行末なかくこそおほされめあなゆ、しとていた
きとりたてまつるをなをしはしなどもえの給はす

ゆくすゑをたのむともなき命にてまたいはねなる
松にわかる、とあるを見給へらん宮の御心ちけにいか
はかりかはおはされつらんとおほしめすに又あまになり
給にけるにもいひ契給ひしこと、もまつ思ひいてられ

」（一三六丁オ）

給ていみしうなき給へる所に
をくれしとちきらさりせはいまはとてそむくもなにか
かなしからましとあるを御らむしはつるま、にさくりもよ、
とかやみたれかはしき涙のけしきを中将かちかくできく
らむ事もあまり心よはきやうなりとおほしつ、めと
なくより外のことなし

かすめよな思ひきえなんけぶりにもたちをくれては
くゆらざらまし

おちたきる涙のみおははやけれとすきにしかたに
かへりやはするなとかきつ、けさせ給ても返／＼かひなく

」（一三六丁ウ）

おほしめさる、事かきりなけれは宮には御らんせむたひ
ことに中／＼なみたのもよほしとも成ぬへく又かの人の
ほたしにもいと、かゝりぬへき物にて侍めるをこのひとまき
はかりはす、しきみちのしるへにもなし侍らんいまは
とてもかくてもかひなきことをすきぬるかたのことなおほし
なものせさせ給ひそなときこえなくさめさせ給てこの
ゑひとつをとらせ給てわたらせ給ぬるを宮は心のとかに
見すなりぬること、あかすくちおしうおほえさせ給て
ひくらしなきくらさせ給さま心くるしけなりうへは
一ところおきふし御らんするに海山浪風のけしきより

はしめて女のしわさとは見えすかきましたるふての

なかれひきこめてやみなむはくちおしうおかしさも哀さも
見しらむ人に見せまほしきをさい院はかりにはいみしく
御らんせさせまほしけれとみつからならさらむかきりは
さすかにめはなちかたき物を心のとかにをきたらんも
あすもありとはおもふへくもあらぬ世に見るほとの心
さしにはこれをたにもとふらはんあるにまかせてありぬへ

かりける身のほとをた、我ゆへこそはこの世をもいとひすて
あの世のさまたげともなるらんとおほしめせは我御もとに
のこしをかせ給もいとおしくおほしめされて」（二三七丁ウ）
すきにけるかたをみるたにかなしきにゑにかきとめて
わかれぬるかななどおほしめせとありし扇はかりをの
こさせ給てこまくとなして経のかみにくはへてすかせ給
てこんていのねはん経御てつからかせ給けりかのときはをも
やかて寺になさせ給てこの御れうのくとくはそこにて
そ日にしてつくりかさねさせ給けるさかの院の御
こ、ちなやましくおほしめされて程へにけれとかく
こそなどもの給はせずうちはへ御ときも御さははかりを
とらせ給つ、かのいもゐはかりにて阿弥陀仏にむかひき
こえさせ給てた、とくむかへさせ給へとねんしいらせ

」（二三八丁オ）

給へるに此十よ日となりてはおさくえおきるさせ給はず
ならせ給にたるにそれもみたてまつりさはきける
一条院の后兵部卿宮などもこの比はひとつ所にあつまらせ
給ておほしなくさまどもいと心くるしけなり御かと
もとよりあるへき程の御心さしさりはあらぬ御中なれば
おほつかなかりきこえさせ給を院よりもいま一たひのたい
めんはかならすあるへきさまにきこえさせ給へれは八月
一日ころ行幸あり院いみしくおほしよろこひてあなたちに
おきるさせ給て御たいめんありみたてまつらせ給しころ

よりもいみしき御さかりにあるへきかきりねひとの
」（二三八丁ウ）

はせ給へる御さまことに見たてまつらはいのちのひぬ
へきをまつうちななかせ給て月ころも物いと心ほそくて
けふやとのみ思ふ給へつるをかゝるみゆきをまち侍りて
なむけふまでもなどのたまはする御さまもけにいとたの
もしけなうよはらせ給にけるといとかなしく見たてま
つらせ給いとかはかりにならせ給ふまて御いのりなどもさらに
せさせ給はずとなくてすぐさせ給つらんこそいとあしき
ことに侍れすこしもれいならすおはしまさむおりなとは
明くれつかうまつるへき物とおもふたまへしほいなくいまて
見たてまつらさりけること、てうちなかせ給をいとたし
けなく哀におほしめさるなにかいまはおしむへきよはひ
にも侍らすなからむのちにこのとまり給はん宮たちをと
ふらはせ給はんのみこそうれしき事には思ふ給へき兵部卿
宮はいまはさりともいたつらにはなさせ給はしと御心さし
の程もたのもしくおもふ給へ侍れはいと心やすうなりて
侍り入道の宮こそこの世をわかれん事ももろともにと
おほしきねかひ又みつからもと、めむは心くるしき事におもひ
給へれとつるにはそのおもひもたかひぬへきに侍める
をおほしをこたらすとふらはせ給へおほやけにならせ給
ては中くかやうにさひしきやとをおほしやらんことはかたく

」（一三九丁ウ）

こそ侍れと御心の程を見をきて侍れはたのもしくなむ
 くらゐをさらせ給へてもこゝをあらさてかならすみ給へ
 なと申をかせ給へはなに事もおほしをきてむにたかへ
 させ給ましきよしをきこえさせ給にくれぬれはかへらせ
 たまひなんとて入道の宮のおはしますなかへたてのしやう
 しくちによらせ給て御あふきをすこしならさせ給へは
 中納言のすけき、つけてまいりたるもむかしの心ち
 せさせ給ていと、物あはれなりこゝのへの宮つかへ
 のむけにをろかなるもこの比はいとことはりとみゆる
 野へのけしきかなとのたまはせてかゝるつるてなどに

」（一四〇丁オ）

みつからきこえさせては又いつかはとれいの心つくしなる
 御けしきもめつらしくてまいりてきこえさせははつね
 よりも物おほしみたる、ころにてなに事をかはきこゆへ
 からんとてうこかせ給はぬを院もきかせ給てみつから
 猶きこえさせ給へ人つてにはあるましき事なりと御
 せうそこあれはいとくしく、ましけれとやかてお
 はしますところちかき程なれはすこしよらせ給へるを
 さにやとおほゆる御にほひのうちかほりたるもまたな
 らはせ給はさりつることなれは心さはきしてうれしきに
 むねさへおとろくしくなるも人わろき御心なりいま

」（一四〇丁ウ）

いかてかけくしきも見えたてまつらてかゝるかたに
 つけても見なをされたてまつるわさもかな思ひいふにも
 かひあるへき御さまにもあらぬ物をなとしゆておほし
 なくさめつ、この御心ちのことなとをすくよかにきこえな
 させ給へはけにかたはらいたくき、くるしき事には
 あらねとはかくしくいらへきこえさすへきこともおほえ
 させ給はねはた、うちなけかせ給へるもあやしくなへ
 てならす物あはれけに心くるしき御けはひなを人よりは
 ことにおほさる、をかくしなしたてまつりけんよとおほ
 しつ、くるにそしのひかへさせ給つる涙もりいてさせ

」（一四一丁オ）

給ひぬるあさましくおほつかなき御もてなしをおもへは
 すべて身よりほかにつらき人なけれは猶いかてとくあら
 ぬところもかなとねかひ侍もいさやさてもかくうき物に
 おほしはてられなからいつくにもありかたくや後の世も
 いたつらとかやなし侍らむこそいみしけれしにもせしとかま
 ことに身を○おもひ給へわひにたれ

消えはて、かはねははいになりぬともこひのけぶりは
 たちもはなれしとの給はするまゝにみすのうちになからは
 いらせ給て御そのつまを引よせてなきかけさせたまふ涙
 のしつくのところせさもおそろしくわりなきに院の

御かたより道たとくしからぬ程にかへらせ給ひねみたり

」（一四二丁ウ）

心ちもいまなむきえはへるやうに思ひ給へらるゝとき」
えさせ給へるをきかせ給御心ちとも御さま／＼にみた

れて物もおほえさせ給はぬに右大将まいり給ひて

御こしよせたるさまそうし給へはいてさせ給ふ御心ち

中／＼おほつかなくてすぐさせ給ひし月ころよりも

あかす哀におほしめされて御こしにもたてまつりや

らす御まへの花さかりにさきみたれて夕露をもた

けにひもときわたしたる色／＼いつともなく見をき

かたきなかにをみなへしの人のみことやくるし

」（一四二丁オ）

からん霧のたえまわりなけなるけしきにてたち
かくれたるはなをいとすきかたくおほしめさる

たち帰りおらてすきうきをみなへし猶やすらはむ

霧のまかきにとなかめいらせ給へる御かたちの

ゆふはへなをいとかゝるためしはあらしと見えさせ

給へるによとゝもに物をのみおほしてすき給ひぬる

こそいかなりけるさきの世の契にかとこそ見え給へれ

（遊紙一丁）
(後見返し・裏表紙)

天正二十稔菊月廿五日

寿三

（花押）（一四四丁ウ）

越後木戸元斎

」（一四二丁ウ）

（以上）

（朱長方印）

」（一四三丁オ）

（白紙）

此狹衣全部

四帖元斎

卷二

借予本書写畢外題所望之

次加奥書也

天正廿年桃花之節後

當子

法橋紹巴（花押）（一四三丁ウ）

大閣大相國朝鮮國御征伐之

時張陣於肥之名護屋者春

月也今茲季秋廿五日詣西府之

天満宮維持幸而有連歌一千

句之雅会不顧愚昧陪席末実為」（一四四丁オ）

神助也此狹衣全部四冊在洛陽借

臨江老人秘本雖贍写之當社一乱以来

作灰燼故別當信寬態求也仍奉

納之而後代留予名於此廟者榮之又榮也

（こばやし・ただまさ 本学大学院博士後期課程
／日本学術振興会特別研究員